

Kazami Osamu “Corona” Theory: Scars that Bridge Hansen’s Disease Sufferers and Atomic Bomb Survivors

NISHIMURA Minetatsu

Kazami Osamu has multiple identities, Hansen’s disease sufferers / atomic bomb survivors, but he has been regarded as only a Hansen’s disease suffers writer because he has been recorded in Complete Works of Hansen’s Disease Literature. However, a personality is not formed by only one identity (Hansen’s disease sufferers).

A personality is formed by multiple overlapping identities such as sex, educational background, occupation and so on. So, Kazami should have been conscious of his identity as an atomic bomb survivor.

Therefore, this article analyzed how Kazami drew two identities of Hansen’s disease sufferers / atomic bomb survivors in “Corona” to reveal this novel suggests a possibility of the solidarity between Hansen’s disease sufferers and atomic bomb survivors. After that, this article consider how literary genres has been organized.

Therefore, in this article, by analyzing how the Kazami drew two identities of Hansen’s disease sufferers / atomic bomb survivors in “corona”, “corona” is a person with different parties of Hansen’s disease sufferers and atomic bomb It suggests the possibility of solidarity.

風見治「コロナ」論

—ハンセン病患者・被爆者を架橋する傷跡—

西村峰龍

豊橋技術科学大学非常勤講師

序

近年、ハンセン病患者の書いた作品に注目があつまり、ハンセン病文学を読む読書会や豊島区立中央図書館で「ハンセン病と文学展」が開催され、ハンセン病文学の存在が人口に膾炙してきている¹。また、二〇〇二年には、ハンセン病文学研究においても鶴見俊輔等によって『ハンセン病文学全集』が編纂されるなど、ハンセン病文学研究は飛躍的に進展した²。

従来の研究では、ハンセン病文学に限らず、「原爆文学」・「沖縄文学」・「フェミニズム文学」・「植民地文学」などいわゆるマイノリティー文学は、その名を冠したジャンル事にアンソロジーが編まれ、研究が進展してきた。その結果、当該ジャンル事に編成された作品群を通して、様々なマイノリティー問題に対する注目があつまり研究が飛躍的に進み、既存の文学史への再検討がなされた。

しかし、マイノリティー文学がその名を冠したジャンルに編成され、様々な読みの可能性を内包した作品を一文学ジャンルの枠内に押し込める読みに収斂し、読者にそのような読みを押しつけてしまう可能性には注意が払われてこなかった。

ハンセン病文学においても『ハンセン病文学全集』は、ハンセン病に焦点を当てて編纂されたこともあり、本稿で取り上げる風見治のようにハンセン病患者／被爆者という複数のアイデンティティ（当事者性）を抱えるハンセン病患者の作品を「ハンセン病文学」という一文学ジャンルに押し込めることとなった。つまり、書き手が持つ複数のアイデンティティが読者に対して不可視化され、読みを狭めてしまう恐れがあるのだ³。

事実、『ハンセン病文学全集』に収録された風見の作品「鼻の周辺」「不在の街」には、「原爆」や被爆者に関する事象が出てくるにもかかわらず、全集の著者紹介には風見が自宅で被爆したことには全く触れられていない。

風見は、ハンセン病者／被爆者であったこともあり、ハンセン病者や被爆者が作中に出てくることが多く、「ハンセン病文学」というジャンルに留まるものではない。そもそも、一個人の内面において、一つのアイデンティティ（ハンセン病者）だけが、前景化し、個人を形作る事など有り得るのだろうか。人は性別・学歴・職業等、複数のアイデンティティが重なり合って形作られるものではないのか。だとするならば、風見はハンセン病者としての当事者性のみを背負って生きてきたのだろうか。被爆者としての当事者性は意識されなかったのだろうか。少なくとも風見の作品を読む限りでは、ハンセン病者／被爆者という複層的な当事者性が作品に反映されているように思われる。

風見の作品では、原爆乃至被爆者が登場してもハンセン病者が主人公である場合が多いのだが、本稿で取り上げる「コロナ」は、被爆者を主人公として、展開される稀有な小説である⁴。

また、従来のハンセン病文学研究においては、伝記的研究において、山下多恵子「海のサソリ—明石海人と島比呂志反ハンセン病文学の系譜」（二〇〇三年一〇月 未知谷）や鶴岡征雄『鷲手の指—評伝冬敏之』（二〇一四年一月 本の泉社）といった伝記が出版され、北條民雄の作品群や小川正子「小島の春」などに研究が集中していた状況から変化しているものの、風見については伝記的研究はなされていない。風見の作品群についても佐藤健太が「[鼻の周辺]の周辺」（『ハンセン病【日本と世界】—病い・差別・いきる』二〇一六年二月 工作舎）で形成外科手術によるハンセン病と被爆との関係については言及があるものの、形成外科手術に着目した限定されたものとなっている。

そこで、本稿では、風見がハンセン病者／被爆者という二つのアイデンティティを「コロナ」においてどのように描いたのかを分析することで、「コロナ」がハンセン病者と被爆者という別々の当事者性を持つ人々の連帯の可能性を示唆している事を明らかにする。

一 ハンセン病者／被爆者としての風見治

作品の分析に移る前に、論の見通しを良くするためにも、風見治の経歴を確認しておく⁵。風見は（本名松尾直）一九三二（昭和七）年七月三〇日に長崎市に生まれる。一九四三（昭和一八）年にハンセン病を発病し、国民学校五年を二学期で中退する。家族が強制隔離から逃すために、風見を親戚の家に預ける。ほとぼりが冷めた頃、自宅に戻り、療養する。この辺りの事情については、岡田将平のインタビュー記事が詳しい⁶。岡田の記事によると「病気の発覚は5年生の時。顔や手に大豆くらいの大きさのこぶができた。町医者から行くように言われた長崎医科大学（現長崎大学医学部）付属病院では、診察室ではなく階段で診察を受け、ハンセン病と診断された。療養所に入るよう言われたが、菊池恵楓園（熊本県合志市）に見学に行った兄は、周囲を囲む高い壁に驚き、「こんな所に入れてはならない」と思ったという。家族は強制隔離から逃れるため、風見さんを親戚の元に預けた。」と書かれている。この当時、隔離政策が遂行されており、家族の療養所に入れずに親戚のもとに預けるといった判断は非常な困難が伴ったことは想像に難くない。

しかし、インタビュー記事では、「1945年8月9日、療養のため風頭町の自宅にいた風見さん

は原爆を体験した一人でもある。閃光（せんこう）を目撃し、爆風を受けた。ハンセン病の苦難の中を生きた半生とともに、原爆にどう向きあって来たのかを知りたいと思い、鹿屋市の国立療養所星塚敬愛園で暮らす風見さんを訪ねた。」この記事にはさり気なく、風見は「療養のため風頭町の自宅」で被爆したと書かれている。戦前のハンセン病は「癩病」と呼ばれ差別の対象とされ、国家による隔離政策が遂行されてきた。この事を指して従来のハンセン病研究においては「強制隔離」「絶対隔離」と呼び、国家の差別的な隔離政策を糾弾してきた⁷。だが、風見が療養中に自宅で被爆したという事実は、国家による隔離政策が如何に苛烈であろうとも、一つの例外もない強制的乃至絶対的な隔離は無かったことを証している⁸。

風見は、長崎市風頭町での被爆についてインタビュー記事で、「原爆に遭ったのは、発病してから2年後のことだった。45年8月9日。風見治さんは爆心地から約4キロの長崎市風頭町の自宅にいた。飛行機の音が聞こえてきて、米軍のB 29かと思ひ、軒下から空を見上げた。母親に「母ちゃん、早う家に入らんね。敵機が来よるごたる」と声をかけた。突如、目の前が真っ青の光で包まれた。そして爆風が襲った。晴れていた空は、真っ黒に変わった。家の壁がはがれ、柱もずれた。「屋根は、クワで掘り起こしたみたいになった」と述べており、原爆の破壊力の凄まじさを伝えている。

風見は、被爆についてエッセイ「八月の思い」（『火山地帯』一九八七年一月 火山地帯社）で、「長崎に原爆が投下されたとき、私は軒端の陰から空の機影をさがしていた。光が空をおおったのは一瞬のことだった。そのあとを爆風がおそい、壁が落ち、屋根瓦は鍬で掘りおこしたように砕けた。甘藷の葉は黒く焼けてちぢれ、雷がなり、雨粒がポツポツ。市街地のあちこちから火の手があがった。そして、おびたしい人が死んだ。」とインタビュー記事より詳しく当時の状況を描いている。

風見は同エッセイで、被爆後の雲仙市小浜町への避難についても「無条件降伏は八月十五日。焦土と化した街にアメリカ軍が上陸してくるとのデマが流れた。犯される、殺される、略奪されるとの流言にまどわされて、私の家も親類の家族と長崎から逃げ出した。四十キロ余りの道のりを一昼夜かけて歩き、両親の郷里だった島原半島の小浜へ。海に面している点では、危険度は長崎にいるのと大差なかったのにと、愚かだったことに気づいたのは後日のことだ。」と当時の緊迫感が伝わってくるような調子で述べている⁹。

風見は、南日本文学賞（一九七八年）など、複数の文学賞を受賞し、五大文芸誌にも複数回作品が掲載されている。加賀乙彦は『ハンセン病文学全集 2』（二〇〇二年九月 皓星社）の「解説」で風見について「小説書きとしての風見治の才能はもっと知られていいと私は思う。」と高い評価を与えている。

では、本章で分析する、「コロナ」はどのような評価を受けていたのだろうか。まずは、「コロナ」の成立事情と選評を見ておきたい。「コロナ」は菊池恵楓園患者自治会の機関誌『菊池野文芸特集号』（一九六一年十月 患者自治会）に掲載された。戦前からハンセン病療養所の機関誌では、投稿された作品（小説・詩・俳句・短歌等）の選評を著名な文学者が担当していた。この

時期の『菊池野』の選評担当者は、詩は谷川雁、評論は山本健吉、俳句は阿波野青畝、そして小説を椎名麟三と非常に豪華な顔ぶれであった。

椎名麟三は「コロナ」について、「さて当選をきめなければならなくなつて、いささか困惑したということを白状しなければならない。『僕の貧乏談義』をのぞいてはハ氏病患者の社会的疎外というモチーフを持つているのだが、そのモチーフを生かすテーマのえらび方という点においては、風見さんが一番すぐれているだろう。そのテーマを支える作者の精神もかなりしつかりしたものだ。技術的には、『コロナ』の文体にも問題があるし、女主人公の恒子の心理にもあいまいなところがあるが、とにかく力作であることだけはまちがいないだろう。で、その点を考慮して次のようにえらんだ。当選風見治『コロナ』佳作小泉孝之『帰国と愛情』伊藤武『ふるさと』と述べ、高く評価している¹⁰。

次節では、既に見てきたように、作家・作品とも高く評価された風見の小説「コロナ」分析する。

二 差別を可視化する傷跡

本節では「コロナ」分析をするが、まずは「コロナ」の梗概を確認しておきたい。

「コロナ」は原爆投下から十五年後の一九六〇（昭和三五）年の長崎と熊本のハンセン病療養所を舞台に、療養所で働く被爆者の看護師恒子を中心として、展開されていく。

恒子は被爆によって、顔にケロイド化した痣を持っている。恒子は被爆によって、引き起こされる苦難を耐え忍び、周囲にも被爆した事実を隠し続けている。恒子は長崎に母と弟の信吾を残し、熊本のハンセン病療養所で働き、日曜日にだけ、帰省する生活を送る。その後、療養所に入所しているハンセン病者の潔が恒子に反発し、「片輪じゃないか、ホヤケじゃないか！」と罵声をあびせる場面が描かれる。その後は、恒子と療養所に入所しているハンセン病者の水藤淳との恋愛を中心として描かれていく¹¹。恒子は淳の子供を妊娠するが、被爆の影響が胎児に現れることを恐れ、自身が被爆者であることを淳に告げ、墮胎すると訴える。淳は、墮胎に反対し、「僕と死んで欲しい！」と訴え、恒子と一緒に園を出るよう提案する。だが、恒子は療養所当局に女性のハンセン病者を装って、淳の脱走を電話で密告する。翌朝、恒子は同僚に見送られながら、療養所を退職し、長崎に帰る。

以上が「コロナ」の大まかな梗概である。ここからは「コロナ」の分析に移りたい。

まずは、被爆者の恒子の相貌がどのように描かれているのかを見てみたい。

あれから十五年を経っていたのだつた。あの時から、間もなく恒子のそれとはさだかではなかつた白い傷痕が赤く隆起し、ケロイド化しはじめたのだつた。小判のような広さが、原爆が彼女に強いてつけさせたお面だつた。恒子はそれでも素直に育つた。母や信吾を悲しませないためによくわらつた。しかし彼女がわらうとケロイドだけがこめかみのあたりへひきつって、彼女の陰惨に美しい顔を歪めた。(中略) それでも恒子は二十三の年令まで、自分を偽り、生きつづけてきたのだつた。(中略)

彼女は小さい頃火傷のあとをもっている看護婦だつた。恒子はその醜さをもっていることによつてハンセン氏病療養所の看護婦になつた女だつた。長崎から熊本へ、彼女をハンセン氏病と疑うものあつても、恒子が原爆の傷痕をもつた女であることは誰もしらなかつた。恥辱とあらゆる偏見とに耐え、忍んだ歴史、彼女が看護学院を受験したとき、彼女だけは別個にライの検診をうけさせられたのだつた¹²。

引用部分からは、恒子の顔にケロイド化した傷跡があることがわかる。また、恒子は母や弟の信吾を悲しませないために素直に明るく生きようとしている。だが、恒子のそのような素直に明るく生きる姿は「自分を偽り、生きつづけてきた」ものに過ぎない。恒子は顔に刻まれたケロイド化した傷跡からハンセン病を疑われ、看護学院を受験した時にハンセン病の検診をうけられる。恒子が被爆を隠してきたことによつて、被爆を証するケロイド化した痣はここでは、ハンセン病を疑われる遠因となっている。

だが、もし、恒子にケロイド化した傷跡が無ければ、恒子はハンセン病を疑われることは無かつただろう。ケロイド化した傷跡は本来、外見からは判断することの出来ない、病原菌を保菌していることや被爆して放射能を浴びたことをそのような事実のあるなしにかかわらず、周囲に可視化してしまうのである。

また、恒子の人生は「恥辱とあらゆる偏見とに耐え、忍んだ歴史」と述べられている。恒子が原爆の傷痕を持つことを「誰もしらなかつた。」とあることから、ここでの「恥辱」とは、ケロイド化した傷跡からハンセン病を疑われたことであるのは明白である。外見上の障害としてあらわれるケロイド化した傷跡は、被爆とハンセン病を結びつけ周囲に可視化する。つまり、恒子は、被爆の傷跡をハンセン病の症状と誤解して結びつけられることに「恥辱」を感じ、「耐え、忍んだ歴史」として認識しているのだ。この事は、恒子が、ハンセン病療養所の看護師であるにもかかわらず、ハンセン病患者を被爆者よりも下の存在として認識していることを証している。

では、恒子は自身よりも下の存在として認識しているハンセン病患者と療養所内において、どのように接していたのだろうか。重度のハンセン病患者である潔の看護をしている場面を見てみたい。

「なんだ、偉そうにして。片輪じゃないか、ホヤケじゃないか！」これが潔の最初の憎らしい拒否だつた。恒子はそのとき、音をたてて崩れる自分をみたのだつた。意外な攻撃だつた恒子は相手をみくびつた己の無防備に羞恥した。不具者の安易な処世術は、自分がいうまゝに相手に不具を指摘させてはいけなかつた。常に対象の心に執拗に観察を試み、対象の心を敏捷に喝破することが勝利だつた。

「変でしょう？」「醜いでしょう？」とわらつて相手に問いかけ、自分では何とも思っていないのだというふうには振舞うのだつた。

恒子は潔という対象にだけそれを指摘させたのだつた。それは潔の醜さが彼女を安心させていたということが出来た。たくれあがつた病衣からのぞく、木乃伊のような肌をした褐色

の臀部、床ずれ潰瘍を掩つたガーゼは濃汁にぬれ、彼はおまけに僵儻であつた。恒子は自分の思いあがりを鋭く潔に刺しつらぬかれたのだつた。(中略)

拒絶は相変わらずやまなかつた。ライ性神経痛に犯され、彼を業苦の痛みで責めていた。歯を猿のように剥き、ベッドの鉄骨をつかんで泣き叫んだ。彼はそれでも涙はながさず、恒子を拒むのだけはわすれなかつた。(中略)

「親つて悲しくて憐れなものねえ」と恒子の同僚間ではそういう、「あんな子のどこが可愛いのかしら、惨めだわ」という囁きに処理されてしまつていたのだつた。

恒子の同僚の「あんな子のどこが可愛いのかしら、惨めだわ」との囁きからも分かるように潔も恒子と同じように「木乃伊のような肌」「僵儻」という外見上の障害によって、ハンセン病患者であることが周囲に可視化されている¹³。自身と同じように外見上の障害によって周囲から可視化されている潔から恒子は「片輪じゃないか、ホヤケじゃないか!」と自身の肉体的な特徴を差別語によって侮辱され、面罵される。

潔の面罵は、ケロイド化した傷跡がハンセン病患者の潔にも平等に可視化されていることを示している。恒子が潔にだけ、ケロイド化した傷跡を指摘させたのは、「木乃伊のような肌」で「僵儻」の潔を恒子が自身よりも「醜」いと認識し、潔の「醜さ」が周囲に可視化されている自身の「醜さ」を緩和させると感じ、「安心」していたからである。

だが、自身の可視化が弱まると感じるその傲慢な余裕を潔は見抜き「片輪じゃないか、ホヤケじゃないか!」と自身の肉体的な特徴を面罵する。

その結果、ハンセン病患者／被爆者の断絶が露わになる。被爆者の恒子は自身のケロイド化された傷跡の「醜さ」が周囲に可視化されたことを「恥辱」と感じながらも、耐え忍んでいるが故に、自身より「醜」いハンセン病患者の潔を周囲に可視化されている自身の「醜さ」を緩和させる存在として認識し、差別する。ハンセン病患者の潔は、恒子の潔を自身より「醜」い存在として認識し、安心する傲慢さに反感を露わにし、自身の苦難を被爆者である恒子のケロイド化された痣を罵倒し、差別することで解消しようとする。

ここでは、被爆者とハンセン病患者がお互いの周囲に可視化された外見の「醜さ」故に相手を差別する姿が描かれているのである。だが、被爆者とハンセン病患者を結びつけ統合させるものも外見の「醜さ」なのである。先ほどの場面の続きを見てみたい。

この場面は、看護しようとした恒子の腕に潔が噛みついているところである。

だが恒子は腕を無理にはなそうとはしなかつた。彼女の眼は痛みを耐えることによつて活々と輝きはじめるようだつた。潔の口には皮膚をつき破つて血がながれこんでいた。それでも恒子はむしろ恍惚に沈んだ。彼女を責め、彼女自身の存在を命がけで否定する潔が彼女には無限な愛に感じられた。自分がハンセン氏病と僵儻という二重苦のなかで虐げられ、差別されながら、なお他人を差別し排他的であろうとする小さな支配者が可愛いのであつた。

潔は「ハンセン氏病と僵僕という二重苦」に苛まれながらも、被爆者である恒子を差別し、命がけで否定する。しかし、恒子は自身を命がけで否定する存在である潔に「無限な愛」を感じ、受け入れる。恒子は、自身と同じ「醜さ」を抱えた潔が、周囲に可視化される「醜さ」を受け入れず抗うが故に、「醜さ」に抗わず、耐え忍び、自身より「醜い」存在によって自身の「醜さ」を緩和している恒子に反発を感じていることを察する。

恒子は、自身のケロイド化された痣という被爆者の「醜さ」と潔の「ハンセン氏病と僵僕」であるという「醜さ」を、潔に噛みつかれた腕を無理にはなさず、肉体と肉体を接触させ、痛みを耐えることによって重なり合せるのである。

本節での分析から被爆者とハンセン病者は、周囲に可視化された外見上の障害という共通項を持ちながらも、そのことを受け入れた被爆者の恒子、受け入れられず反発するハンセン病者の潔が差別し合う姿が確認できる。

しかし、被爆者の恒子・ハンセン病者の潔を重なり合せ、ある種の和解—当事者であるが故に、別の当事者の痛みに対して思いをはせる／理解できるというふるまい—へと導くのもまた周囲に可視化された外見上の障害である。

三 重なり合わないハンセン病者／被爆者

二節で、被爆者とハンセン病者は、周囲に可視化された外見上の障害によって、互いに差別し合いながらも、ある種の和解へと導かれる様相を検討してきた。だが、「コロナ」には潔以外にももう一人ハンセン病者が登場する。二節の梗概でも述べたが、恒子と恋愛関係になる水藤淳である。恒子と淳の恋愛は、二節で分析した潔の看護をする場面の後に描かれる。淳の相貌は下記のように描かれている。

彼の手の指はみんな掌の中に屈折していた。物をつまんだり、多くの生活の条件に即応するのに非常に「物」的だつた。ケースをひらくのにも、煙草をとりだすにも、悠長にのろわしいほどに緩慢な時間を要した。ときには唇をつかつて手の不自由さを補うことがあつた。それはみている恒子を苛々させることがあつた。

淳も潔と同じように外見に障害を抱えている。だが、淳の外見の障害は潔よりもずっと軽いことが分かる。では、淳はハンセン病が引き起こした自身の外見上の苦難に対して他者に怒りを向けているのだろうか。恒子が患者事務室にいる淳を訪問し、其処で、淳が読んでいた本から、被爆者とハンセン病者の共通点について聞く場面を見てみたい。

「ぼくはライの置かれている社会的な位置というものを、もつと客観的に見究めたいと思って、それでこんな本を読んでみているんです」淳は本をめくりながら言つた。「日本には三つほどの大約した社会的な偏見といつたものがあるということです。「部落」にたいする

差別、共産党にたいする悪宣伝、ライにおける偏見といったものですね。それでほくは「部落」にたいする差別などがもつとも単的に社会的な病根としての形態をとつているように感じました。ところが、最近原爆被爆者が第二の部落民としての位置におこまれようとしている事実を発見したのです」(中略)

水藤淳は恒子のそうした苦悩に親切ではなかつた。彼は原爆被爆者にあらわれている条件について語つた。それによれば被爆者は、第一に現実の身体上の苦痛、不快感を直接もたらず諸障害をもち、第二に将来罹病するかもしれないという絶えざる恐怖と緊張をもちつづけるといつた。(中略)

「そして、第一と第二の総和のなかから孤独感、広い意味での“否定“の意識が生まれるんですね。これはどうしてもライの場合と酷似するんですよ。たとえば第二が被爆者の将来にたいする不安は具体的に発病、遺伝などの問題に入るわけです。白血病や小頭児、片輪が生まれはしないかという恐れと死にたいする不安、こうしたことが自己否定にまで進展するし、強い孤独感となる。(中略)ほくはとにかくライ患者のもつ身体的、精神的状態と強い共通性をもつ原爆の被爆者にたいする興味を覚えたんです」

淳は潔と違い自身のハンセン病に纏わる苦難を他者(恒子)に向けようとはせず、寧ろ、自身(ハンセン病者)と同じように差別されている「被差別部落」や被爆者に眼を向けて行こうとしている。淳は潔とは逆に自身の苦難を他者へと向けるのではなく、「被差別部落」や被爆者という他者にも共通する差別という苦難を見ているのである。

ここで、淳が「被差別部落」と被爆者を挙げていることは示唆的である。当然のことながら「被差別部落」差別は外見上の障害が原因ではない。では、被爆者はどうだろうか。恒子はケロイド化した傷跡によって周囲に可視化され差別を受けてきた。しかし、淳は被爆者を「被差別部落」差別と同じように扱っているのである。

更に、注目したいのは、淳は「第一と第二の総和のなかから孤独感、広い意味での“否定“の意識が生まれるんですね。これはどうしてもライの場合と酷似するんですよ。」と述べながらも、例として挙げるのは、第一の「現実の身体上の苦痛、不快感を直接もたらず障害」ではなく、第二の「招来罹病するかもしれないという絶えざる恐怖と緊張」に基づいた、「白血病や小頭児、片輪が生まれはしないかという恐れと死にたいする不安」である。この事は、淳が周囲に可視化される外見上の障害ではなく、周囲に可視化されず、外見に現われない、発病や遺伝によって、ハンセン病者／被爆者を重ね合わせていることを証している。

二節で分析した恒子のハンセン病者／被爆者としての重ね合せは周囲に可視化される外見上の障害に基づくものであり、腕をかまれても無理に引かないという行動によってなされていた。淳のここでのハンセン病者／被爆者／「被差別部落」の重ね合せは、周囲に可視化された外見上の障害によってではなく、本を読んで得た知識によって精神面においてなされる。淳と恒子のハンセン病者／被爆者の重なり合う様相は、潔の場合と比べ、全く逆なのである。

淳の本を読んで得た知識によって精神面においてなされるハンセン病患者／被爆者との重なりは破綻する。恒子が淳に自身が被爆者であることを告げる場面を見てみたい。

「そんな馬鹿なことが！」

淳が恒子の体ゆすぶつた。

「ほんとよ」

「いやだ、ぼくは絶対に厭だ！」

深淵にのめりこむような声だつた。

「だつたらどうしろというの」恒子は淳の手から己をつきはなした。「そんなこと、エゴイズムよ。わたしたちは将来の長い時間に、そんなことでどうして責任をもてるの。……あなたはいつか言つたわ。そうよ、そのとおりのよ、わたしはいつ白血病で死ぬかわからないわ、小頭児や片輪の子だつて、生れないとは保証できないわ。それをどうしろというのよ。わたしは墮すわ！」

淳は柵の横板をつかんで怒りにふるえていた。彼は全ての崩壊を感じている、恒子は目を反した。

「帰るわ」

恒子は水藤淳に瀬を向けた。もうそこには厚い壁がつくられていた。

「待つてくれ！」

のめりこむような叫びだつた。恒子はその声に足がすくむのを感じた。

「僕と死んで欲しい！」

また壁が厚くなつた。しかし、淳の喘ぎと殺気ばしつた眼はそこに充血していた。

「安易すぎるのよ！」恒子は彼を冷静にみることができ、淳の肩ごしに堀にそつてのぼつてくる白衣を着た患者の姿をみた。「はなして……誰かくるわ。……でも、わたしは明日の朝五時半に出るの。通用門は五時の交代時から開くはずよ」

恒子はいつた。

「ほんとだね、信じていいんだね……」

淳はほとんど哀願するようにいつた。恒子は頷いた。

ここでは、被爆者の恒子とハンセン病患者の淳の断絶が浮き彫りとなる。淳は恒子から自身が被爆者であり、淳との子供を墮胎することを告げられ、動揺し、「僕と死んで欲しい！」とまで哀願するが、「安易すぎるのよ！」と恒子に拒絶される。淳は本を読んで得た知識によって精神面において、ハンセン病患者／被爆者を重ねていたが、周囲に可視化された外見上の障害に立脚しない重なり合いは脆く、恒子の被爆者であるという告白の前には何の効力も発揮しない。本を読んで得た知識によるハンセン病患者／被爆者の重なりは、自身の子を身ごもる恒子が被爆者であるという現実を前にして「いやだ、ぼくは絶対に厭だ！」と感情的に叫び、「僕と死んで欲しい！」

という身勝手極まる発言を生み出すことしかできなかったのだ。この場面の後、恒子は淳との間に壁を感じ、淳を療養所に置き去りにして、故郷の長崎に帰る。

ここにおいて、淳の周囲に可視化された外見上の障害ではなく、本を読んで得た知識によって精神面においてなされるハンセン病患者／被爆者の重なりは完全に破綻するのである。

結

ここまでの分析によって、風見がハンセン病患者と被爆者という二つのアイデンティティを「コロナ」において、異なる当事者間の連帯と断絶の様相が周囲に可視化された外見上の障害を通して、描いていることを確認した。

具体的には、潔と恒子の関係性に見られるように、周囲に可視化された外見上の障害を通してという限定付きではあるが、当事者であるが故に、別の当事者の痛みに対して思いをはせる／理解できる、ことが示されている。

だが、その一方で、「本を読んで得た知識」による差別される者同士の連帯の可能性は、淳と恒子の関係性に見られるように否定されている。それだけでなく、周囲に可視化された外見上の障害を持たない者は、例え当事者であっても厳然と連帯の可能性は閉じられている。まして、周囲に可視化された外見上の障害を持たない者については言うまでもないだろう。この事は、ハンセン病患者と被爆者という別々の当事者性を持つ人々の連帯の可能性と断絶を示唆している。

「コロナ」掲載時と前後するものの島比呂志は「生きてあれば」（『生きてあれば』一九五七年十月 大日本雄弁会講談社）で、「人間は自分より幸福な者を見ると羨望したり失望したりする。その反対に自分より不幸なものを見ると勇気づけられたり希望をもつようになったりするものである。ところが、癩を病むわたしたちには、このような一般論は通用しない。なぜなら、自分より不幸な者を見ると、ほとんどないからである。（中略）今年の夏、来園した原爆乙女たちは、わたしたちに会って勇気づけられたという便りを寄せている。いかに醜さや不自由さにおいて癩に似ているにしても、原爆症には偏見の歴史がない。彼女たちは、自分たちより不幸な癩患者を見て、希望と勇気を抱いたのにちがいない。」と述べている。

島は療養所を訪れた原爆乙女の「わたしたちに会って勇気づけられたという便り」に「彼女たちは、自分たちより不幸な癩患者を見て、希望と勇気を抱いたのにちがいない。」とハンセン病患者と被爆者の断絶を感じ失望している。島の失望は既に見てきたように作中でハンセン病患者の潔が被爆者の恒子にだいた怒り同じものであることはいまでもない。「コロナ」で描かれたハンセン病患者と被爆者という異なる当事者性を持つ人々の断絶は実際におこっていたのである。

しかし、「コロナ」では断絶だけでなく、異なる当事者性を持つ人々の連帯の可能性も示唆されている。作中の恒子のように人は「自分より不幸なものを見ると勇気づけられたり希望をもつようになったり」するが、「コロナ」では、遺伝・業病・伝染・被爆という本来可視化されない事柄が周囲に可視化される外見上の障害によって重なりあう様相が描かれ、周囲に可視化された外見上の障害を通してという限定付きではあるが、当事者であるが故に、別の当事者の痛みに対

して思いをはせる／理解できる、ことを示している。

更に周囲に可視化された障害が軽度な淳という人物を登場させることによって、差別されている当事者であっても「本を読んで得た知識」に基づくような安易な連帯・共感の感情や非当事者である者が当事者に対して示す、安易な連帯・共感の感情をも厳しく批判する優れた作品といえる。

本稿でも検討してきたように、風見の被爆者としての側面や「コロナ」の登場人物恒子に焦点をあわせるならば、「コロナ」を「原爆文学」としても読むことが可能なのはいうまでもない。

また、ハンセン病政策の誤りを国家が認めた後も、「コロナ」が描いた遺伝・業病・伝染・被爆という本来可視化されない事柄が外見上の障害から周囲に可視化され、熊本県の宿泊拒否事件のように今なお、差別を生み出し続けている¹⁴。

今後は、風見の作品群を周囲に可視化された外見上の障害を手がかりに、本来、可視化され得ない事柄が周囲に可視化されることの暴力性やハンセン病患者／被爆者の連帯の可能性などを「ハンセン病文学」研究「原爆文学」研究の両側面から検討していくことが求められるだろう¹⁵。

注

- 1 佐藤健太・谷岡聖史編の『ハンセン病文学読書会のすすめ』（二〇一五年三月 ハンセン病文学読書会）で、佐藤・谷岡がハンセン病に関心を寄せる人達と開催した、ハンセン病文学読書会において取り上げた作品の梗概や収録した作品集などの書誌情報を丁寧に紹介し、ハンセン病文学作品を読む読書会を行うことを勧めている。豊島区立中央図書館での「ハンセン病と文学展」については下記 URL から確認できる。
<https://www.library.toshima.tokyo.jp/images/upload/%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%BB%E3%83%B3%E7%97%85%E3%81%A8%E6%96%87%E5%AD%A6%E5%B1%95.pdf;jsessionid=9C298761702D0E1FEF79EDA41C3DAFAD>
(二〇一九年一〇月三十一日 確認)
- 2 二〇〇二年に鶴見俊輔・加賀乙彦・大岡信等によって『ハンセン病文学全集』（二〇〇二年九月 皓星社）が編纂された。また、近年のハンセン病文学研究の重要な成果として、荒井裕樹『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』（二〇一一年一月 書肆アルス）があるが、ハンセン病患者の周囲に可視化された外見上の障害についてはふれてはいない。
- 3 R・スクールズは『テキストの読み方と教え方ヘミングウェイ・SF・現代思想』（一九九九年七月 岩波書店）において、「ジャンルとは、関連する一群のテキストから推定されるコードのネットワークのことだ。ジャンルは言語と同じようにリアルであり、言語と同じような圧力をそのコードのネットワークを通じて発揮する。ジャンルはまた言語と同じように、その命じるところに愚鈍にしたがう者と、それに軽やかに挑戦するものに出会う」と述べている。
- 4 ハンセン病患者を主人公とした作品として「鼻の周辺」「不在の街」など。
- 5 風見の経歴については、『ハンセン病文学全集』と岡田将平「(ナガサキノート) ハンセン病と原爆と」(『朝日新聞デジタル』二〇一四年一月一六日 朝日新聞社)を参照した。
- 6 岡田将平「(ナガサキノート) ハンセン病と原爆と」(『朝日新聞デジタル』二〇一四年一月一六日 朝日新聞社)
- 7 藤野豊『日本ファシズムと医療』（一九九三年一月 岩波書店）『「いのち」の近代史—「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』（二〇〇一年五月 かもがわ出版）等が挙げられる。
- 8 近年のハンセン病研究においては、隔離政策の遂行下においても、療養所外での治療や療養所外での労働が行なわれていたことが明らかになっている。坂田勝彦が『ハンセン病患者の生活史—隔離経験を生きるということ』（二〇一二年五月 青弓社）において、ハンセン病患者の聞き取りから、戦後の療養所において通称「労外」とよばれる労務外出が行なわれていたことを明らかにしている。
- 9 「八月の思い」(『火山地帯』一九八七年一月 火山地帯社)

- 10 「選評」（『菊池野』一九六一年九月 患者自治会）また、引用内「」を『』に置き換えた。
- 11 現在では「片輪」の語は差別語であるが身体障害者を差別する意図はなく、当時の歴史的文脈をふまえ、「コロナ」からの引用を「片輪」と表記する。
- 12 風見治「コロナ」の引用は初出『菊池野文芸特集号』（一九六一年一〇月 患者自治会）に依った。また、引用の際は旧字を新字に改めた。
- 13 現在では「僂僂」の語は差別語であるが尙僂病患者や骨軟化症患者を差別する意図はなく、当時の歴史的な文脈をふまえ、「コロナ」からの引用を「僂僂」と表記する。
- 14 菊池恵楓園入所者自治会編『黒川温泉ホテル宿泊拒否事件に関する差別文書綴り』（二〇〇四年五月 菊池恵楓園入所者自治会）
- 15 「原爆文学」研究において。被爆者の外見上の障害に言及したものとしては、近年では村上陽子『原爆文学と沖縄文学—出来事の残響—』（二〇一五年七月 インパクト出版会）がある。